

## 北魏洛陽における捨宅寺院の性格

### 服部 克彦

北魏の首都洛陽は中國佛教史上における國都の中にあつて、佛教寺院の数が非常に多く、別名を佛教都城と稱されるくらいにその名を後世に残している。當時の有様は魏書釋老志を初めとして、洛陽伽藍記・水經注等によつて今日に傳えられているものである。

さてこれ等の書物によつて當時の洛陽における佛教寺院についての詳細にみるに、捨宅寺院の数のかなり多數にのぼることに氣付くのである。洛陽伽藍記によつてその數を出してみるに、記載するところの寺院六十數ヶ寺の中、十四ヶ寺を教えることが出来る。ところで北魏佛教全盛期における洛陽佛教寺院の數、一千三百餘ヶ寺、その後、東西兩魏に分裂をなし衰亡の一途をたどるわけであるが、それでも猶、洛陽には四百餘ヶ所にのぼる佛教寺院が存したとある。

しかるに洛陽伽藍記にはこのような多數のものの中、有名なる大寺院や、故事・傳説を有するところの特異な佛教寺院についてのみが記述されているにすぎない。しかし、この六十數ヶ寺の寺院は、全盛期の一千三百餘ヶ寺にくらべると、數の上では非常に見劣りするが、その寺院の内容より見る時には非常に興味をそそるものがある。このやうな點からして、この記載されているところの佛教寺院が、當時の洛陽における一千三百餘ヶ寺にのぼる佛教寺院のそれぞれの面を代表するものとして、これ等六十數ヶ寺の佛教寺院のあり

方からして、北魏佛教の一つの面をうかがうことが出来ると思つたのである。そこで洛陽伽藍記によつて捨宅寺院について見ると、記載する六十數ヶ寺の中、次の様に十四ヶ寺をかぞえることが出来る。

城内十二ヶ寺のうち、三ヶ寺。城東二十二ヶ寺のうち、四ヶ寺。城南十六ヶ寺のうち、二ヶ寺。城西十三ヶ寺のうち、五ヶ寺。

この數からすると、當時の都洛陽における佛教寺院の地理的な分布からしても、平均して捨宅寺院が存在していたことがわかり、特別に捨宅寺院のみが出来ている地域があつたとは考えられない。このことからして一千三百餘ヶ所にのぼる佛教寺院の中には、かなり多數の捨宅寺院の存在していたことを推察することが出来る。それではこの様に多數にのぼる捨宅寺院の存在したことについて、その原因を考えてみたい。

北魏が洛陽に遷都してから、やがて東西兩魏に分裂してゆくまでの首都洛陽そのものについて少しふれてみたい。高祖孝文帝の太和十七年(483)洛陽遷都が決定し、それまでの都平城(大同)から國都の移轉にかゝつたのである。ところで次の世祖宣武帝以後は、北魏朝廷の變亂期に入り、北魏王朝の末期的様相を呈するやうになりやがて永熙三年(533)東魏が、翌年(534)西魏が對抗して東西兩魏に分裂してしまつたのである。つまり洛陽遷都から約四十二年間で國都としての命脈がづきたのである。そこで先の一千三百餘ヶ所にわたる佛教寺院であるが、この總てが平城よりの遷都以後のものかと思つてはならない。しかしながら捨宅寺院については、洛陽遷都以後のものが非常に多いことに氣が付く。このことは洛陽佛教寺院についての一つの特徴とみなしてよからうと思われる。

それではどのやうな過程で北魏洛陽において、このやうに多數の

捨宅寺院を生じせしめたかを、捨宅寺院の實際の有様からして研討してみたい。そこで先の十四ヶ寺の捨宅寺院について、種々な面からそのよつてくるところを研討してみるに、種々の要素からこれら捨宅寺院の造建者についてみると、次のやうに大別できる。

- 一、北魏帝室關係者によるもの、六ヶ寺
  - 二、所謂北方實力者によるもの、一ヶ寺
  - 三、官僚階級の人々によるもの、三ヶ寺
  - 四、來降者（南朝側よりの）によるもの、一ヶ寺
  - 五、一般士庶によるもの、三ヶ寺
- 以上の如くに五つの種類にわけられることが出来る。なお、これらに分類したものの一つ一つについて、そのよつて來るところを詳細にみると更に次の様な結果が出てくる。

- 一、北魏帝室關係者によるもの、六ヶ寺の中、
  - イ、帝室關係者の死亡によつて、その死亡者の追福祈願のため捨宅造建されたもの三ヶ寺。
  - ロ、帝室關係のごたごたで害された者に對して、その死亡者の追福祈願のため捨宅造建されたもの一ヶ寺。
  - ハ、河陰の役(528)遇害者の追福祈願のため捨宅造建されたもの二ヶ寺。
- 二、所謂北方實力者によるもの、一ヶ寺、その實力者一族中の死亡者の追福祈願のため造建されている。
- 三、官僚階級の人々によるもの、三ヶ寺の中、
  - イ、居住する邸宅の地下より西晉時代の佛像を掘り出した爲に捨宅し寺院となすもの、一ヶ寺。

北魏洛陽における捨宅寺院の性格（服部）

ロ、常人の死亡により追福祈願のために捨宅し寺院となすもの、一ヶ寺。

ハ、奉佛者たる官僚が邸宅の一部を分宅して、寺院をなすもの、一ヶ寺。

四、來降者（南朝側よりの）によるもの、一ヶ寺、北魏に來降したが再び南朝側に逃げ歸るに際し捨宅して寺院となす。

五、一般士庶によるもの、三ヶ寺の中、

イ、居住する邸宅が西晉時代の寺院址なるを知りて、捨宅して寺限となす、一ヶ寺。

ロ、屠業者で猪に乞命されて、これより捨宅して寺院となし一家全員が入道したもの、一ヶ寺。

ハ、先夫の喪を治めずに次夫をとり、居宅も變えずにいた所、先夫の亡靈が現れ惶懼して捨宅し、寺院となし歸佛したるもの、一ヶ寺。

ところで以上のうち死亡者に對する追福祈願のために、その死亡者の邸宅を捨宅して寺院となされたものが、かなり多いことに氣が付く十四ヶ寺のうち八ヶ寺がこれにあつてゐる。しかもこの中の六ヶ寺が帝室關係者によつて占められてゐる點である。またその中には、河陰の役（孝明帝武泰元年(532)爾朱榮、朝臣二千餘人を害す）に死亡した人達に對して、追福祈願のためとしての二ヶ寺が含まれてゐる。この事件以降、所謂北魏王朝が末期症狀を呈することになるのであるが、これ以後における捨宅寺院の増加は加速度的なものとなつて現れてくる。しかもそれが帝室關係者を初め上層階級に屬する人々によるものが、その殆んどを占めてくることも、北魏洛陽における捨宅寺院の特色の一つとみてよいであらう。